

軽快退院した成人・高齢者が捉えた望ましい看護行動に関する質的研究¹

昭和大学保健医療学部 高野幸子
聖徳大学心理教育相談所 富島大樹
筑波大学人間系 藤生英行

An exploratory study of desirable nursing behaviors from patients' view

Sachiko Takano (University of Showa, yokohama-si, Kanagawa, 226-8555)

Hiroki Tomishima (University of Seitoku Research and training institution of Clinical Psychology, Matsudo-si, Chiba, 271-8555)

Hideyuki Fujiu (University of Tsukuba, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-0012)

Many researchers recommended patient-centered nursing behaviors. However, few studies examining patients' views on nursing behaviors have been conducted. This study explored patients' perspectives on desirable nursing behaviors. Fifty adults who had been hospitalized completed an open-ended questionnaire that required them to describe in their own words their positive experiences of nursing behaviors. We analyzed verbatim records using the K-J method and classified them into 7 major categories comprising 26 sub-categories. Using these categories, we conducted a correspondence analysis. The results indicated that young men preferred safe and quality care, whereas women appreciated a communicative relationship between nurse and patient. In addition, older adults (age 60 and over) valued care behaviors that alleviated their pain. Based on these results, the desired behavior differs depending on the patient's age and sex. Further direction of research was also discussed.

Keywords: nursing behavior, open-ended questionnaire, patients' view

問題と目的

看護師の看護行動の受け手である患者は、看護師のどのような看護行動を望ましいと捉えているのであろうか。

厚生労働省や文部科学省は、個人や家族の複雑なニーズに対応できるようなカリキュラムを構築している。講義、演習、臨地実習と系統立てて学習させ、看護実践能力の高い看護師の育成を要請している。具体的には、看護基礎教育を修了するまでに求められる到達目標を提示し、指導を強化する内容として、コミュニケーション能

力や看護実践能力を明示している（厚生労働省、2011）。このようなコミュニケーション能力や看護実践能力、卒業時の到達目標の達成度に関する先行研究は見受けられる（水戸・小山・片平他、2011）。

このようにして育成した看護師の看護行動を患者はどのように感じているのであろうか。

先行研究を概観すると、例えば、前川・操（1996）は、中心静脈栄養法の消毒の場面で、患者が良いと認識するケアについて調査している。患者8人を対象に、半構造化面接を行い、7カテゴリー「処置の確実性・適切性」「患

¹ 本論文は第1著者が平成28年度に筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻カウンセリングコースへ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

者の権利擁護」「応対」「日常会話」「情報提供」「先取りしたケア」「回復の保障」を報告している。また、平元・白戸・佐野（2015）は、ICUで看護ケアを体験した患者4名の語りから、6カテゴリー「患者役割としてケアを受容」「声かけと気配りから得た満足感」「存在と継続看護が与えた安心感」「提供された看護技術への満足感」「ICU看護師の好印象」「様々な苦痛を内在」が生成されたと述べている。しかし、これらは中心静脈栄養の消毒といった限定された看護場面や、患者が重症で看護必要度の高い場面といった通常ではない場면을調査対象としている。通常の一般病棟において、患者は看護師のどのような看護行動を望ましいと捉えているのかについての知見は少ない。そこで、患者は看護師のどのような看護行動を望ましいと捉えているのかを明らかにする必要がある。

本研究の目的は、患者は看護師のどのような看護行動を望ましいと捉えているのかを明らかにすることとした。

目 的

一般病棟に入院した後に軽快退院した成人・高齢者が捉えた看護師の望ましい看護行動を明らかにする。

方 法

研究方法

期間 2016年7月～8月

対象 入院経験のある成人男女80名に機縁法により協力を求め、61名より回収した。うち出産による入院と回答した9名と無効回答の2名を除外し、50名（男性21名、女性29名、年齢25歳から82歳、平均年齢53.4歳SD±13.4）を有効回答とし、分析対象とした。

調査の手続き

データ収集 自由記述式質問紙調査票の質問の表現の仕方（聴き方）を確定するために半構造化面接を7名の

研究協力者に実施した。インタビューガイドに基づき一人あたり30分～45分間実施し、ICレコーダーに録音した。インタビューガイドは、以下の通りである。(a)入院経験の中で患者が良いと思った看護師の行動について、(b)研究協力者の年齢、入院経験は何年前か、入院した診療科名、についてである。ただし、出産入院や重症な入院経験を持つものを除いた。

研究協力者への依頼と回収方法 上記の手続きによって確定した質問の表現の仕方（聴き方）を用いた自由記述式質問紙調査票を、研究へ協力することに同意した方を対象に配布した。さらに、研究協力者の知り合いに研究の協力を呼びかけてもらう機縁法を用い、研究協力者とした。自由記述式質問紙調査票を郵送にて回収した。

自由記述式質問紙調査の質問項目 以下のとおりである。(a)「入院経験の中で『あの時の看護師は良かった』と思う看護師を思い浮かべて、あなたにどのような声掛けをしてくれましたか、またはどのようなことをしてくれましたか」である。(b)フェイスシート項目として、年齢、性別、何年前の入院経験か、病気による入院か、ケガによる入院か、出産による入院かの記入を求めた。

分類の手続き 質問紙調査で得られた回答を、カウンセリングを学ぶ大学院生4名がKJ法（川喜多, 1967）を援用して「望ましい看護」を表している最小単位を1項目として分類し、4名の合意が得られたことをもってカテゴリーを生成した。意見が分かれたときは、合意が得られるまで話し合いをしてカテゴリーを決めた。

結 果

研究協力者の属性

調査協力者から得られた有効回答人数は50名であった。内訳は、男性21名、女性29名であった。年齢は、25歳から39歳が8名、40歳から59歳が30名、60歳から82歳が12名であった。全員が病気による入院であり、病状が重症ではなく軽快して退院した。内訳をTable 1に示す。

Table 1 研究協力者の年齢・性別・病気の種別・転帰

	男性	女性	病気	ケガ	出産	軽快退院
25歳から39歳	3	5	8	0	0	8
40歳から59歳	14	16	30	0	0	30
60歳から82歳	4	8	12	0	0	12
合計	21	29	50	0	0	50

生成されたカテゴリーの性別別にみた項目数

50名から得られた患者が捉えた「看護師の望ましい看護行動」についての総項目数は116件であり、7つのカテゴリーが生成された。カテゴリーに記述された項目数を男女別に見た。研究協力者は、男性は21名、女性は29名であったが記述された項目数は男性の方が多かった。Table 2 に示す。

生成されたカテゴリーと項目数

116件から26のサブカテゴリー、7つのカテゴリーが生成された。具体的に内容をみていくと、7つのカテゴリーの内訳は、「苦痛緩和を促す対応」38件（32.4%）、「親しみやすい振る舞い」36件（30.7%）、「人として尊重」11件（9.4%）、「闘病支援」9件（7.7%）、「安全な医療」9件（7.7%）、「日常生活の援助」9件（7.7%）、「チーム連携」4件（3.4%）であった。内容をTable 3 に示す。本研究で新たに生成された概念は「人として尊重」であった。

コレスポンデンス分析

対象の属性と患者が捉えた看護師の望ましい看護行動を表す7つのカテゴリーの関連を見るために、コレスポンデンス分析を行った。

年代別に分析 患者の年齢を20歳から39歳、40歳から59歳、60歳以上の3グループに分け、それぞれの年代別に7つの患者が捉えた看護師の望ましい看護行動との関連を分析した。寄与率は85.6%であった。

20歳から39歳は、「親しみやすい振る舞い」「安全な医療」「日常生活の援助」を望ましい看護と捉えていた。40歳から59歳は「人としての尊重」「闘病支援」「チーム連携」を患者が捉えた看護師の望ましい看護行動と示していた。60歳以上は「苦痛緩和を促す対応」を患者が捉えた看護

師の望ましい看護行動と認識していた。Figure 1 に示す。

年代別にかつ性別別に分析 患者を年齢別に年齢を20歳から39歳、40歳から59歳、60歳以上に分け、さらに男女別に分けて、患者が捉えた看護師の望ましい看護行動との関連を分析した。寄与率は66.5%であった。

20歳から59歳までの男性は、「人として尊重」「安全な医療」との関連を示し、これらを患者は看護師の望ましい看護行動と捉えていることがうかがえた。

20歳から59歳までの女性は、「親しみやすい振る舞い」「闘病支援」「チーム連携」「日常生活の援助」の看護師とのコミュニケーションを示すカテゴリーとの関連が認められ、これらを患者は「看護師の望ましい看護行動」と捉えていることが見出された。

60歳以上は男性女性ともに「苦痛緩和を促す対応」というカテゴリーとの関連が認められた。Figure 2 に示す。

クラスター分析

次に、患者の年代とカテゴリーの関連について詳細に検討するためにクラスター分析を行った。患者の年代とカテゴリーについてコレスポンデンス分析の主成分得点をクラスター分析（Ward法）にかけた。クラスター間の距離5を基準に分けた結果、三つのクラスターに分類された。一つ目のクラスターには20歳から39歳の特徴がまとめられ、「親しみやすい振る舞い」「安全な医療」「日常生活の援助」の親しみやすさや身の回りの安全を示すカテゴリーが集まった。二つ目のクラスターには40歳から59歳の特徴が集まり、「人としての尊重」「闘病支援」「チーム連携」の尊重や心理的支援を示すカテゴリーが集まった。三つ目のクラスターには60歳以上は「苦痛緩和を促す対応」の苦痛緩和を促すカテゴリーとなった。

Table 2 各カテゴリーを男女別に見た項目

カテゴリー	男性	女性	計
Categories patients' views			
苦痛緩和を促す対応	22	16	38
親しみやすい振る舞い	18	18	36
人として尊重	7	4	11
闘病支援	7	2	9
安全な医療	4	5	9

Table 3 「患者が捉えた看護師の望ましい看護行動」

カテゴリー 件数(%)	サブカテゴリー	項目数(%)
苦痛緩和を 促す対応 38(32.4)	不安や痛みを和らげようとする対応 ^{a)}	9(7.6)
	気にかけて声をかけられる ^{a)}	8(6.8)
	共感の声かけ ^{a)}	5(4.3)
	前向きな言葉かけ ^{a)}	4(3.4)
	褒める声かけ	3(2.6)
	辛い時のボディタッチ	3(2.6)
	励ましの声かけ ^{a)}	2(1.7)
	話を聞きに来る ^{a)}	2(1.7)
	気持ちを予測した対応	2(1.7)
親しみやすい 振る舞い 36(30.7)	明るい声かけ ^{a)b)}	11(9.4)
	丁寧な対応 ^{a)b)}	10(8.5)
	柔軟な対応 ^{a)b)}	5(4.3)
	笑顔で接する ^{a)b)}	4(3.4)
	さりげない対応 ^{a)b)}	3(2.6)
	頼みやすい雰囲気づくり ^{a)b)}	3(2.6)
人として 尊重 11(9.4)	人として個人名で対応する	5(4.3)
	一人の人のとしての尊重	5(4.3)
	家族友人を尊重	1(0.8)
闘病支援 9(7.7)	わかりやすい退院生活や薬の説明 ^{a)}	6(5.1)
	検査や病気の説明 ^{a)}	2(2.6)
	治療への意識づけ	1(0.8)
安全な医療 9(7.7)	迅速な対応	6(5.1)
	病状を予測した対応 ^{a)}	3(2.6)
日常生活の援助 9(7.7)	身のまわりの世話 ^{b)}	9(7.6)
チーム連携 4(3.4)	職員の連携の良さ ^{b)}	3(2.6)
	いい雰囲気作り	1(0.8)

注) a) 前川・操(1996)と同一のカテゴリー, b) 平元・白戸・佐野(2015)と同一のカテゴリー, □は新しく生成された概念である。

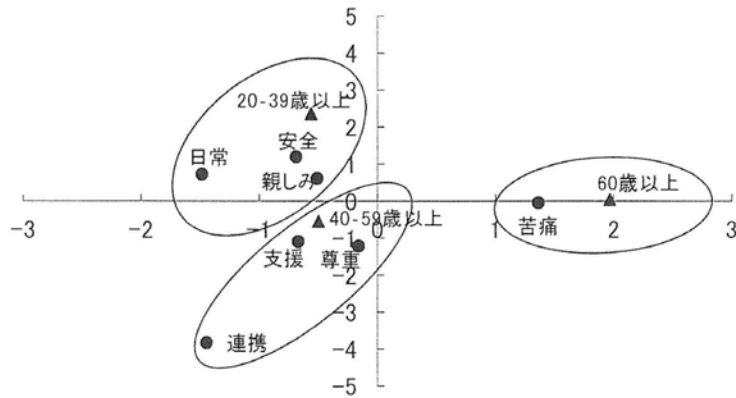


Figure 1 患者の年代と患者が捉えた「看護師の望ましい看護行動」のカテゴリーとの関連

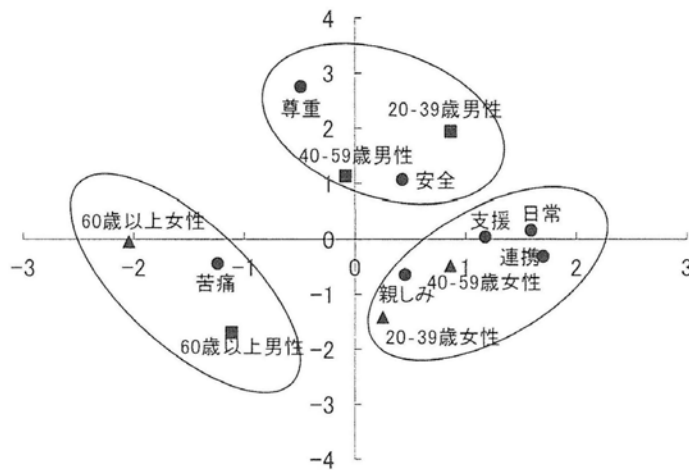


Figure 2 患者の年代・性別別にみた患者が捉えた看護師の望ましい看護行動のカテゴリーとの関連

考 察

患者が捉えた看護師の望ましい看護行動に関する新たな概念

本研究で新たに生成された概念は「人としての尊重」であった。本研究は、調査対象が患者50名と多数であった。このことにより、先行研究より多様なデータを得ることができた。平元他（2015）は中心静脈栄養法の消毒場面を調査し、前川・操（1996）は高度な医療を提供す

るICUに入院した場面であったが、本研究では、それよりも軽症である一般病棟への入院経験者を調査した。患者は病状が比較的軽く、日常生活の自立度が高い。そのため患者が看護師と病状に関する会話をかわす他に、普段の社会的な会話を通して、人としての尊厳の回復を感じていたことから「人としての尊重」というカテゴリーが新たに生成されたと考えられる。

年代別の特徴

20歳から39歳では「親しみやすい振る舞い」「安全な

医療」「日常生活の援助」の親密さや身の回りの快適さを示すカテゴリーがかたまりとなった。40歳から59歳では「人としての尊重」「闘病支援」「チーム連携」の尊重や心理的支援を示すカテゴリーが集まった。60歳以上は「苦痛緩和を促す対応」が示された。それぞれの年代に応じた発達課題と相応しく、特に40歳から59歳は成人期で社会的な地位を確立している段階にあることから、「人として尊重」されることが新たなカテゴリーとして抽出されたと考える。

年代別で性別別の特徴

加えて、本研究では年代や性別ごとに特徴を示せた。具体的には、20歳から59歳までの男性は、「人として尊重」「安全な医療」を患者は看護師の望ましい看護行動と捉えて、20歳から59歳までの女性は、「親しみやすい振る舞い」「闘病支援」「チーム連携」「日常生活の支援」の看護師とのコミュニケーションを患者は看護師の望ましい看護行動と捉え、60歳以上は男性女性ともに「苦痛緩和を促す対応」を患者は看護師の望ましい看護行動と捉えていた。これらは、看護学生や看護師が年齢や性別の異なる患者へ対応する際に援助の方向性を示唆しており、本研究の貴重な知見であると考えられる。

臨床での適用について

本研究であらたなカテゴリーとして「人として尊重」が示された。「人として尊重」することは、看護理論やテキストによく記載されていることであるが、患者が望んでいることが明確になった。人として尊重する看護行動を提供できるよう、今まで以上に努めていく必要がある。

さらに、看護師が20歳から59歳までの男性には「人として尊重」「安全な医療」を、20歳から59歳までの女性には「親しみやすい振る舞い」「闘病支援」「チーム連携」「日常生活の支援」を、60歳以上には男性女性ともに「苦痛緩和を促す対応」を今まで以上に配慮して看護行動を取る必要性を示唆し、看護学生に指導する視点となり、

今後の看護教育に寄与すると考えられる。

本研究の限界と今後の研究の方向性

本研究の対象者は成人と高齢者であり小児が含まれていない。病気による入院経験が多く、ケガによる入院や出産による入院を含んでいない。

さらに、研究協力者である患者が、各カテゴリーや項目にどの程度の重みづけをしているのかを調査できていない。

加えて、今回得られたカテゴリーや項目が、入院期間や受け持ち看護師との接触頻度、日常生活の自立度などの要因と関連があるのかについて、検討できていない。

これらは本研究の限界であり、今後の課題である。

今回得られたカテゴリーを一般化できるよう、質問項目に起こし、質問紙調査を行い、量的に検討する必要性がある。

引用文献

- 平元いずみ・白戸幸子・佐野好美 (2015). ICUで看護ケアを体験した患者の思い 日本看護学会論文集 急性期看護, 154-157.
- 川喜多二郎 (1967). 発想法 創造性開発のために 中公新書.
- 厚生労働省 (2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書
- 前川美智子・操 華子 (1996). 患者がよいと認識するケアの構造 看護, 48, 184-192.
- 水戸優子・小山真理子・片平伸子・山口由子・川守田千秋・植村由美子・野崎真奈美・鶴田恵子・手島 恵 (2011). デルファイ調査による看護教育者と看護実践者が合意する看護基礎教育卒業時の看護技術の到達目標と到達度に関する検討, 日本看護科学会誌, 31, 21-31.
- (2017.12.21受稿 2018.7.27受理)